

CAGLIERO¹¹

カリエロ11

サレジオ会宣教ニュース N.82 - 2015年10月

サレジオ会宣教部門によるサレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信



友 人の皆さん

第146回宣教派遣の宣教師たちは、すでに目的地に向けて出発しましたが、彼らの履物の跡と宣教の情熱は、ヴァルドッコの大聖堂に残っています。私たちは主に深い感謝を覚えます。なぜなら、すべての人へ ad gentes 遣わされる宣教の召命は、「主が本会を愛し、ご自分の教会のために本会が存続するよう望み、新たな使徒的活力をもって絶えず本会を豊かにしてください」(会憲第22条) 明らかかなしるしでもあるからです。

新宣教師たちとの研修コースで、すべての人へ ad gentes、国を出て ad exteros、生涯をささげて ad vitam 宣教に遣わされる召命が、一人ひとりにとって、教会と世界にとって、いかに尊い聖霊の賜物であるかを直に体験できたことは、私にとって大変興味深いことでした。ですから、私たちは、いのちを与えられる主、Dominum et Vivificantem 主でありいのちの与えぬしである方に、よりよく耳を傾け、お迎えするにはどうしたらよいか、どのように聖霊を呼び求めたらよいか、知らなければなりません。一人ひとりの宣教師を呼び出し、形づくり、遣わし、共に歩んでくださるのは、主です。今日も呼んでおられるのは主です、自分の国を後にし、出かけて行くように！「耳のある者は聞き、理解するように……」

J. Basorens

宣教顧問
ギジェルモ・バサニェス神父

奉献生活と宣教には 明確な結びつきがある

教 会の本性そのものに刻まれる宣教的な側面は、あらゆる形の奉献生活に本来、備わっているものでもあります。この側面をないがしろにすれば、そのカリスマは傷つけられ、ゆがめられてしまいます。……第二バチカン公会議公文書『教会の宣教活動に関する教令』の発布50周年にあたり、わたしたちは皆、この文書を読み返し、その内容について考えるよう招かれています。



この教令は、修道会が宣教への力強い推進力を持つよう呼びかけています。観想修道会においては、宣教の守護者である幼いイエスの聖テレジアが、新たな観点から新しい表現を用いて語り、観想生活と宣教が深く結びついていることについて考えるよう光を与えてくれます。

活動修道会の多くは、第二バチカン公会議によってもたらされた宣教への情熱により、諸国の人々 (ad gentes) への宣教を非常に活発に行い、それは、福音宣教の中で出会った地域や文化圏の兄弟姉妹への大いに開かれた姿勢をしばしば伴いました。そのため奉献生活は今日、広く「異文化共存」しているといえるほどです。

だからこそ、宣教の中心となる模範はイエス・キリストであること、さらには、その模範に従うためには、完全に自らを福音宣教のためにささげなければならないことを確認する必要性が緊急にあるのです。この点において妥協は許されません。神の恵みによって使命を受けた人は、その使命を生きなければなりません。奉献生活者にとって、世界の隅々でキリストを告げ知らせることが、イエスに従う道です。それは、どんなに多くの困難に直面し、犠牲を払ったとしても、それ以上に報いのあることです。この召命から逸脱する行為は、たとえそれが多くの司牧的、教会的、人道的な必要から来る尊い動機によるものであったとしても、福音のために自ら奉仕するよう求める主の呼びかけに従っているとはいえません。

Franciscus

2015年「世界宣教の日」
フランシスコ教皇メッセージ



私が宣教地へ行くことは、同胞への福音宣教に役立った



私 は子どものころ、福音を告げるために生涯をささげている人々に数多く出会いました。その人たちは言葉で、あるいは奉仕によって福音を告げていました。私も同じようにしたいと思いました。

ガーナでの修練期のときに宣教師として生きるよう呼ばれていることがかなり明らかになりましたが、宣教地に行くことを初めて実際に考えたのは、2007年に最初のナイジェリア人宣教師がスーダンに派遣されたときでした。

ポストノビスのころ、農村宣教に参加する機会に恵まれました。村人たちの素朴さと神様に仕えようとする開かれた姿勢に私は感動しました。私は何度も自問しました、なぜこの人たちの元に留まらないのかと。その間にも、私の識別は続いていました。そしてポストノビスの最後の年、2012年に、自分の望みと必要に応える気持ちを総長に伝えました。総長は私をバングラデシュに派遣しました。

バングラデシュに来たことは、もう一度生まれて来たかのようなものでした。実際にすべてのこと-文化、言葉、食べ物-を一から学ぶのは、簡単なことではありませんでした。当初の不安に反し、バングラデシュは私がずっと願っていた宣教地だということがわかります。ここで私たちは、本当に助けを必要とする人々のために働いています。人々の素朴さによって、私は自分の良心を誠実に糾明するよう、絶えず助けられていると言えます。そのすべての頂点には、兄弟愛、楽観的な姿勢、快活さの味わいに満ちたサレジオ会共同体で暮らす喜びがあります。

人は言うかもしれません：「なぜ国を出て宣教地に行こうとするの、ナイジェリアにも福音を受け入れていない人たちがいるのに？」第一に、主が私自身を宣教師となるよう呼んでおられると思います。その呼びかけに従わなければ、神の呼びかけから逃げようとした預言者ヨナのようになるでしょう。第二に、宣教地に行くことは、私の信仰と、私の遣わされた人々の信仰だけでなく、私の同胞、出身のキリスト者共同体への福音宣教にも大いに役立ったことに、この数年、気づくようになりました。平均的なナイジェリア人は、より青い芝生のあるところへ移民することしか考えませんが、社会-政治的、経済的、宗教的な問題のある困難なところで働くことを進んで受け入れることが、具体的な宣教のカテゴリーになるのです。

さらに、ナイジェリアは多くの偉大な宣教師に恵まれ、地元の召命は数多く花開いています。ナイジェリアから宣教師が惜しみなく輩出することは、私たちのために生涯をささげることと価値あることと思った最初の宣教師たちに「ありがとう」と言う、ふさわしい方法かもしれません！

もちろん、日々、挑戦はあります、また新しい文化の中に完全に入るには、長い年月が必要かもしれません。しかし、修練長の助言を私は心に留めています：「君は苦しむだろう、しかしその苦しみは、土に植えられた種の苦しみのようなものだ。成長して、皆の益となる実を結ぶために死ぬ、種の苦しみなのだ！」本当に私たちは、キリストの苦しみを共にすることのうちに、それより大きなものはない最大の喜びを体験するのです！



ヨセフ・クンレ・オグンダナ神学生
ナイジェリア出身、バングラデシュの宣教師



サレジオの宣教の聖性のあかし

サレジオ会列聖申請人 ピエル・ルイジ・カメローニ神父

中国とフィリピンへの宣教師、神の僕カルロ・ブラガ神父（1889-1971）は、会員あての1930年の回状で書いています。「主のみ心によりかなう、また私たちにとって最も益となる苦行は、進んで、広い心で、私たちの十字架を形づくる日々の苦難を受け入れることです。私たちの聖なる創立者は、苦行について語る時、その十字架は特に、さまざまな愛着をもつ私たちの自我EGO、悪い自然的傾向を乗り越えるのに必要な努力であると指摘しました。それはあらゆる霊的闘いと切り離すことのできない痛みです……私たちの良き父は、私たちがこの十字架から、昼も夜も、一分でも離れることはできないと言っています。実際、私たちの神なる救い主が何と言われたか、福音に読むことができます。『わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を担って、わたしに従いなさい』（マタイ16・24）」



サレジオ会の宣教の意向

教育・社会事業の使徒職のために働く南アジアのサレジオ会員のために

サレジオ会員が、教育者、司牧者として、教育事業・社会事業で出会う若者たちに神の首位性をあかしし、福音を告げますように。

サレジオ会は、素晴らしい教育・社会事業の優れた働きで知られていますが、神と神の栄光のためだけに生きる霊の人としてはそれほど知られていません。直接的な宣教ができない非キリスト教的な環境にあっても、私たちの教育・社会事業は、私たちの生活と使徒職における神と福音の首位性の、雄弁なあかしです。サレジオ会員が、教育・社会事業を通して、福音の第一次宣教に重きをおくよう、祈りましょう。

